

～健苗育成で活着・初期生育の確保を！！～

今月の作業目安 ～健苗に仕上げて適正な栽植密度で田植え～

5 月 日	上 旬			中 旬			下 旬		
	1	5	10	15	20	25	31		
育 苗	最高気温：25℃以下 最低気温：5℃以上 ※ 移植 1 週間前頃から、低温日でない限り、夜間もハウス開放 かん水：基本は早朝（葉が巻く場合は、気温の低いタイミングで行う）								
本 田	田 植 え 田 植 晩 限 ※ 遅くとも 5 月末までに田植え 耕 起 ～ 代 か き 湛水(田植え直後4cm程度)								

育苗管理の目安（中苗）

育苗管理 ～後半は外気に慣らして、硬く仕上げよう～

- かん水は、朝または午前中に 1 回のかん水量を多くし、散布回数をできるだけ少なくします。ただし、育苗後半は苗が大きくなり箱内が乾きやすくなるので、床土が白く乾いたり、葉が巻き始めた場合には、気温の低いタイミングで応急的にかん水します。
- 通気管理は通常 1 葉期頃から行い、1.5 葉期以降は徐々に外気へ慣らします。移植 1 週間前頃からは低温日でない限り夜間もハウスを開放して外気に当て、硬い苗に育てます。
- 2 葉期以降に葉色が薄くなった場合は、1～2 回程度、液肥等で追肥を行います。ただし、葉色が濃い場合や、ロング肥料を使用した場合は追肥を控えます。

本田準備・田植え ～田植えは極度の低温時は避ける～

- 耕起では耕深 15cm 以上を目指し、無理のない速度での作業を心がけましょう。過度な高速作業を行うと十分な作土層を確保できず、根張りが悪くなります。
- 代かきは浅水状態で浅めに行います。過剰な代かきのかえって水はけを悪くし、ガスわきや表層剥離、アオミドロ（カナ）の発生原因になるため、代かきの回数を 2 回以内に抑え、下層にある程度粗い土塊が残るような状態に仕上げましょう。
- 田植えは、低温や強風下で行うと植え傷みが大きく、その後の活着不良や初期生育の遅れにつながるため、悪天候下での無理な田植えは行わないようにします。
- 植え付け本数は 4 本／株程度とし、3 cm 以上の深植えにならないようにします。
- 強勢茎主体に穂数を確保するためには栽植密度は 70 株／坪 (21.2 株／㎡) 以上を基本とします。50 株／坪以下の疎植は、天候不良年では茎数不足のリスクが高まります。
- 田植え直後は活着を促進させるため、水深 4 cm 程度の湛水状態とし、保温に努めましょう。（活着には 4～5 日かかりますが、気温・水温が高いほど早まります。）
- 田植え晩限は、5 月末と考えられます。特に中晩性品種の遅植えは、出穂期が遅れ、登熟不良が懸念されますので、注意してください。

いもち病対策 ～基本は葉いもち防除の徹底～

【薬剤による防除法】

【育苗期防除】次のいずれかで防除

ベンレート水和剤	ビームゾル
播種時～播種7日後頃	緑化始期
500倍 500ml／箱 1,000倍 1,000ml／箱	500倍 500ml／箱



【葉いもち防除】次のいずれかで防除

箱施用剤	側条施用剤		水面施用剤
移植3日前～移植当日	ペースト肥料混和用	移植同時 (移植同時施薬機を用いて側条施用する)	6月15日頃 (6月12～18日)
ルーチンバリアード箱粒剤 ルーチンアドスピノ箱粒剤 ブーンパディート箱粒剤 等	側条オリゼメートフェルテラ 顆粒水和剤 等	ブーンパディート箱粒剤 等	オリゼメート粒剤
50g／箱	500g／10a	1kg／10a	2kg／10a

※ 薬剤により、使用時期、使用量が異なるため、必ずラベルを確認してください。

※ 水稻育苗終了後のハウスに野菜類を作付けする予定があり、箱施用剤を移植前～当日に使用する場合は、育苗ハウスの外で薬剤を使用してください。

【耕種的防除】

- ほ場に放置された補植用の余り苗は、葉いもちの強力な伝染源になるため、補植終了後は水田の泥の中に埋めるなどして完全に処分してください。
- 乾燥状態で越冬した稲わら・粃殻は、葉いもちの伝染源となるので、ほ場周辺に放置しないでください。なお、敷わらを使用した野菜ほ場の周辺では、葉いもちの早期発生に注意してください。

除草対策 ～一発処理剤単用する場合は代かきから10日後までを目安～

ノビエとホタルイが代かきから各葉齢に達するまでの日数（秋田農試ほ場）

草種	1葉期			1.5葉期			2葉期			2.5葉期		
	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小	平均	最大	最小
ノビエ	7日	9日	5日	10日	12日	7日	13日	16日	9日	15日	18日	12日
ホタルイ	10日	16日	5日	—	—	—	15日	21日	12日	—	—	—

※ 2005～2010年、6ヶ年の調査による。

- 一発処理除草剤の多くは、限界葉齢ノビエ2.5～3.0葉となっておりますが、効果の安定のために、2葉期までの散布が望ましいです。したがって、代かきから10日以内の一発処理剤の散布が効果的です。
- 除草剤散布時の水深は、粒剤では3～5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では5～7cmとし、薬剤が拡散しやすいように水深を確保します。
- 除草剤散布後7日間は止水とします。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。
- 水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は極力避けてください。やむを得ず使用する場合は使用時期は、移植7日前までとなります（登録のある剤に限る）。

◎ご質問は、J A かつの営農経済部(23-2497)か鹿角地域振興局農業振興普及課(23-3683)まで